



一步、前進

「多様性」とよく言うけれど

本校のめざす生徒像の一つは「多様性を尊重し、互いに高め合う生徒」である。近年、「多様性」という言葉がよく使われている。その場合、多様性を認識する起点は、人間、もっと言えば自分だというのが前提だろうが、それを、人間、自分は多様性の中の一つの存在にすぎないと捉ええると、ちょっと違う感覚になるのではないか。人間（自分）はちっぽけな存在であると感じるとともに、気楽さも増したりしないだろうか。

私たちは「人間は高等生物で、昆虫や植物は下等生物である」と決めつけがちである。植物についてなら、「自由な人間と比べて、植物は歩きもせず、食事もせず、その場を動こうとしない、自由のない生き物である。」という感じだろうか。だが、植物の立場から考えるとどうか。植物の立場なら、「どうして、人間はあんなに動かなければ生きていけないのだろう。」ということになるのではないか。植物は動く必要がない。だから動かずに生きている。それだけだ。

「ウィズ・コロナ」という言い方をするが、その点では植物の方が先輩だ。葉っぱや花びらに模様ができる「斑入り（ふいり）」と呼ばれる品種は、観賞用として一般的に価値が高い。実は、その模様はウイルスによって引き起こされる症状らしい。植物はウイルスに感染すると部分的に色素体に異常が生じて、モザイク状のマダラ模様が生じるのだそう。植物はとっくにウイルスと共存している。

先ほど、「植物は動く必要がない。」と言ったが、それは光合成をすることができるからだ。光合成は、細胞の中の葉緑体が行っている。ところが、葉緑体は、細胞の核にあるDNAとは別のDNAを持ち、自分で増えることができるそう。つまり、大きな単細胞生物が光合成を行う単細胞生物（葉緑体の祖先？）を取り込み、植物の祖先が生まれたらしいのだ。後の植物の繁栄を考えれば、本当に革命的だ。

植物だけでなく、百万種以上と言われる昆虫の多様さも、知れば知るほど驚異的だ。人間にとっての常識の範囲でばかり物事を見てみると、視野が狭くなる。そういう意味では、読書はとても貴重だ。物事の本質について考えたり、新たな世界に目を見開かせてくれたりする。映像文化でも可能かもしれないが、自分のペースでじっくり考えるには、読書がいい。夏休み、よい本に出合えることを願っている。

（校長：佐藤 浩二）